「神のみ心を行う者」

マルコによる福音書６章１－6a 節

森島　牧人　牧師

ヤイロの娘を癒された主イエスは、程なくして生まれ故郷であるナザレにお帰りになりました。今日与えられた聖書は、帰郷された主イエスが帰郷先ナザレで思いがけない拒絶に会われるという場面で、「ナザレで受け入れられない」との小見出しが付いています。

そのナザレでの場面は「安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。『この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。』このように、人々はイエスにつまずいた。」（マルコ６：１－３）と記されています。聖書にはファリサイ派の人々、祭司、長老、ヘロデ王など、主イエスを拒否する面々が大勢登場しますが、彼らのいずれにも主を拒絶するはっきりとした理由がありました。それは、主イエスの教えが彼らの教義的立場や政治的立場から見て、極めて不都合なものであったからです。しかし、ナザレの人々の拒否はそのような拒否とは全く異なるものでした。

保守的・伝統的な中で共に生きて来た郷里の人々は、当然主イエス一家のこともよく知っていました。いつ頃、主イエスが家を出て行かれたのか分かりませんが、彼らからすれば、大工という家業を途中で投げ出し、家族を捨てて家を出られた長男イエスは、勝手で無責任な男以外の何者でもありませんでした。この帰郷当時には主イエスの兄弟や母マリアはカペナウムに移り住んでいたようですが、主が出て行かれた際には、残された家族も人々と同じ思いの中にいたのではと推察出来ます。そのような男が権威ある者のように教えを説いている・・・会堂に集まった人々の驚きは私たちの想像を遥かに超えるものでした。

主イエスが神の子として働き始められたこと、すなわち、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受け、荒野での悪魔の誘惑を退けて、福音を伝えるというより福音そのものとしての生涯を始められたことを知らなかった彼らは、主イエスが身近で親しい存在であった故にその教えの内容を問うことをせず、資格のみを問題として、「神の子が、人間という有限の中に御自分を現しておられる」ことを理解する絶好の機会を失ってしまったのでした。聖書には主イエスが「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた（同６：４）とあります。「ナザレ人イエスをキリストとして受け入れる」という信仰を持てなかった故郷では、主イエスは奇跡を行うことがお出来にならなかったと聖書は記しています。主がそこにおられるのに何にも起こらない・・・これは、主イエスが故郷を拒絶されたということだったのかも知れません。

御自身の兄弟・姉妹のことを問われて「神のみ心を行う者」が自分の兄弟であり姉妹であるとお答えになった主イエス。家族を捨て、郷里を捨てるところから始まった主イエスの福音の歩みは、必然にその果てに十字架が待つという歩みでした。そして、この十字架の出来事を経た主イエスの福音は、国を越え、文化を越え、２千年の時を越えて、その出来事、すなわち主イエスの十字架上の死と復活を伝えて、今に至っているのです。